vol.03 2023.3.21

# 家庭科教育研究所 ニュース

Home Economics Education Research Lab.





## 目次

ひろば ······ p.2 - 6 編集コラム ····· p.9 - 11

会員からのひとこと ····· p.6 - 8



桜便りも届き始めました。

みなさまお変わりなくお過ごしですか。

研究所ニュース Vol.3 をお届けします。

本日、第1にお知らせしたいことは、研究所の HP 開設のニュースです。

http://kateika.main.jp/index.html を是非ご覧ください。

会員同士の学び合い、意見交換をする場所ができました。

これからコンテンツを積み込んでいきます。多くの人に訪れていただき、ちょっと大げさですが、 家庭科教育のメッカの 1 つとして育っていけることを願っています。

2つ目には研究所主催の第3回勉強会のご案内です。

今回は、都甲由紀子先生と有友愛子先生とのコラボによる中学校家庭科の授業実践のご報告です。「ペレのあたらしいふく」という魅力的な絵本も紹介していただきながら、衣生活からひろがる生活の総合性へとストリーをつくっていかれる内容です。3月25日(土)と数日後に迫っています。昨日お送りしたURLから、みなさまのご参加をお待ちしています。

「ひろば」には、先日、研究所主催の第1回研修会(2023年2月14日開催・公開)で講師を務めてくださった都甲由紀子先生が、当日の内容をまとめて寄稿して下さいました。先生の専門性に裏付けられた豊かな内容です。授業内容はもちろんのこと、オリジナル動画やオンラインツールの使用、学生の意見の集約など、授業のヒントも満載して、家庭科の総合性が存分に生かされた研修内容を再現して下さいました。お楽しみください。

そして、「会員からのひとこと」欄には、今年兎年の年女の方々にご寄稿いただきました。 私自身がうさぎ年だということもあり、仲間のみなさんがどのようにこの年を迎えられているのだろうとの興味から、ご登場をお願いしました。それぞれ何巡目のうさぎ年なのかは明らかにしませんが、確実に 12 年ごと歳の違うみなさんによる、とても興味深い「ひとこと」になりました。 寄稿して下さったみなさま、ありがとうございました。



# 家庭科教育研究所第1回研修会報告

## 大分大学教育学部 都甲 由紀子

2023 年 2 月 14 日 10 時~ 12 時,家庭科教育研究所の第 1 回研修会にお招きいただいて「絵本『ペレのあたらしいふく』を使った家庭科のガイダンス」の授業を担当しました。当日は和洋女子大学の学生 36 名、卒業生 2 名、先生方 9 名の計 47 名のご参加がありました。研修会の概要を報告します。

私自身は、東京の私立中高で家庭科教諭を6年経験した後、博士後期課程に進学して天然染色の研究をし、現在は大分大学教育学部で被服学の教科専門教員として小学校や中高家庭科の教員養成に携わっています。授業ではいつも、スウェーデンの絵本「ペレのあたらしいふく¹)」を紹介しています。ペレという男の子が労働力を交換しながらある意味自力で自分の服を作り上げるまでの物語です。シンプルに服が作られる工程が描かれているので,布を用いた製作の前に導入としてこの絵本を読み聞かせ、衣服や布に対する関心を高めてから実習に臨むことで、布製品完成までの縫製という一工程を学ぶ意識を持たせることができると考えます。

この絵本は,すべての場面を詳細に読み込んでいくと、家庭科の衣生活以外の内容にも通じる部分が多くありますので、以前から家庭科全体のガイダンスとしても活用できると考えていました。そこで、この家庭科教育研究所第 1 回の研修会においてその構想を実現すべく、このタイトルの授業に挑戦してみることにしました。

授業を提案する前に、少しアイスブレイクの時間をいただきました。2020 年に制作したオリジナル動画「糸について(https://youtu.be/WJfTp9PchkQ) $^2$ )」を視聴していただきつつ、水色と白の  $^2$  色の毛糸を参加者に配り、撚り合わせて紐を作ってもらいました。それから、参加者の意見をリアルタイムに集約してくれる LearnWiz One(https://learnwiz.one)というオンラインツールの使い方を練習しました。 ChatGPT について知っているかなどのアンケートをとりつつ使い方に慣れてもらいました。

ChatGPT(https://chat.openai.com/chat)は、対話形式でやり取りできる OpenAI により開発された人工知能ツールです。今のところその内容は必ずしも正しいとは限りませんが、質問には自然な文章で回答してくれます。

私は「日本の小中高にある『家庭科』という教科について説明してください」と尋ねてみました。具体的内容として挙げられたのは「調理や家事、財政管理、健康な生活」であり、衣生活に関する単語は含まれていませんでした。そこで、「調理や家事、財政管理、健康な生活以外には何を学びますか?」と尋ねましたが、その回答にも衣生活に関する単語は含まれませんでした。そこで「服を着る生活については何を学びますか?」と尋ねたところ、その回答ではようやく衣服の選び方、生地や織り方、衣服の保管や洗濯、衣服の補修やリフォームといった説明がありました。「学生たちは実際に衣服を作ったり、補修したりすることができます」という文章もありました。

昨今の家庭科教育において、衣生活の内容の割合が小さくなっている様子を感じており、その状況を 反映した回答だったと受け止めています。しかし、人は服を着ないで生きていくことができず、家庭科で 学ぶ対象である人間の生活において重要な内容であることに疑いはありません。このような背景のもとに 提案するものであることを伝えた上で授業の内容に入っていきました。

まず、「ペレのあたらしいふく」の絵本の読み聞かせをしました。福音館書店に許可をいただいて 絵本をスキャンして画面に映し出して読みました。ペレが飼っていた羊の毛を刈り、その後様々な人々の 力も借りつつ、服を仕上げるまでの工程が描かれています。ペレの服が出来上がるまでの工程と、 ペレが交換した労働力をまとめたのが表1です。

表1 ペレの服が出来上がるまでの工程と、ペレが交換した労働力3)

担当者	服が出来るまでの工程		ペレが交換した労働力
ペレ	羊を飼う	繊維原料の用意	
	羊の毛を刈る	繊維材料の入手	
おばあちゃん	毛をすく	繊維材料の梳毛	にんじん畑の草取りをする
もう一人のおばあちゃん	毛を紡ぐ	繊維を糸に紡績	牛の番をする
ペンキ屋のおじさん	染め粉の代金を負担する	テレピン油のお買い物をする	
ペレ	テレピン油のお釣りで染め粉を買う	染料の入手	
ペレ	糸を染める	糸の染色	
おかあさん	キレを織る	糸を布に機織	妹のお守りをする
仕立て屋のおじさん	服を作る	布を服に縫製	干し草を集める
			豚に餌をやる
			薪を運び入れる

(都甲由紀子 (2020).ワーク9,中西雪夫他編,第2版 小学校家庭科の授業をつくる : 理論・実践の基礎知識,学術図書出版社より)

参加者には、読み聞かせを聴きながら家庭科の内容に関連することを見つけて、選択肢を選び、具体的にどの場面がどのような家庭科の内容につながるかについて、それぞれ LearnWiz One で回答してもらいました。複数回答可とし、52 件の回答が得られ、衣生活(17 名/ 33%)、保育(10 名/ 19%)、消費生活(10 名/ 19%)、家族・家庭生活(7 名/ 13%)、環境(6 名/ 12%)、食生活(2 名/ 4%)の回答がありました。回答の抜粋を表 2 に示します。

表2 家庭科の内容とペレのあたらしいふくの場面との関連に関する質問の回答(抜粋)

家庭科の内容	絵本の場面	具体的に
衣生活	全体を通して	繊維から、糸、布、洋服になるまでを場面ごとに分けることにより、各工程が分かりやすく書かれている。また、その工程毎に頼る人が変わることによって様々な技術が合わさって洋服が出来上がることが分かる。随所に、道具や名前もが出てくるのでkeywordsとしてプリントでまとめるのにもやりやすいと思う。
環境	糸を染める	染め粉は川に流しても大丈夫、、、?
	羊にお礼を言う	環境に関する内容では、育てることや最後羊毛が自分の新しい洋服になり着用できることに感謝するという場面が、命の尊さや資源がサイクルされているということを教えてくれた。
消費生活	全体を通して	羊の毛を刈ってから服が完成するまでサービスを受けるために対価を払 うという消費生活の内容につながる。
	全体を通して	自分で羊の毛を刈って服を作る自給自足の生活をしている。生産と消費を全て自分で行なっているところ。また、お金ではないけれど労働と引き換えて糸や染粉、服を手に入れている。
家族•家庭生活	全体を通して	全体的に、「人々とお互いに力を借りて支え合いながら、共に生きている」 というのを強く感じられる内容であり、家族・家庭生活の根本的な基盤で あると感じました。
保育	全体を通して	どの場面でも、大人達は生活を支える労働をしている。畑仕事、家畜の世話、住居の修繕、保育など。また、ペレ自身が地域の大人達と交流を重ねながら、生活力を高めながら成長する様子が見られる。地域の中で子どもが育つ、共生社会を感じた。

回答は参加者同士読み合うことができるため、様々な観点から家庭科の内容に繋がることを学び合って もらうことができました。私自身も学ばせてもらいました。

その後、私は染色を専門としているので、「染色」の場面について解説しつつ簡単な染色の演示実験をしました4)。ペレは「染め粉」を手に入れて自分で糸を青く染めています。この染料は合成染料であるといえます。「毛」を染める染料は酸性染料であることが推察されます。Acid Blue 9 という染料は、食用の合成色素青色 1 号(法定色素名)として販売されています。食用でもあるので安全に染色実験に使うことができます。そこで、お湯にこの色素を溶かし、穀物酢を加えて混ぜ、羊毛毛糸を入れて電子レンジで染色しました。するときれいな水色の毛糸になりました。最初に実施した紐づくりワークショップで渡した水色の毛糸は同じ方法で染めたものであることを伝えると、マスク越しにでも驚いてくれた様子が感じられました。

染色をしてみて、絵本の中ではお酢を入れることが省略されていることを伝えました。それ以外にも、たくさんの工程が省略されています。「省略されている服づくりの工程を見つけて説明しましょう」という問いにも、それぞれ LearnWiz One で回答してもらいました。最も多かった回答は「採寸」でした。そのほか、ひつじの毛を洗うこと、染色の際の加熱、糸の乾燥、デザイン、印つけ、裁断、仮縫い、試着補正といった回答が得られました。他にも、紡いだ糸を「糾う」工程、糸染の際に絡まらないよう綛(かせ)にする工程、染めた糸を織機に経糸としてセットする「整経」、緯糸を杼(ひ)に巻く工程などが挙げられることを伝えました。服作りはひとつのプロジェクトです。プロジェクトには予期しないことも起こりますし、細かい段取りも必要になります。これからの社会では、絵本に描かれている工程を丸暗記できる力よりも、絵本に描かれていない工程を見出す力がこれからの社会では重要になるのではと考えていることも伝えました。

ホームプロジェクトはもちろんですが調理実習もプロジェクトですし、家庭科はプロジェクトを実現することを求める教科でもあります。人生をデザインして人生プロジェクトを実現していくために必要なことを学ぶのが家庭科なのではないかとも考えます。そのようなことが伝わるガイダンスになればと考えてこの授業を設計しました。

授業後にふりかえりの時間をいただきました。この授業で学んだことを文章にしてもらい,講師への 質問やコメントを受け付けました。

「電子レンジが使えない場合は他にどのような方法がとれますか?」というご質問をいただきました。 実際にやってみたいと思ってくれたからこそ出た質問です。電子レンジより時間と道具が必要になりますが,耐熱ビーカーを化学実験用のホットプレートの上で温めても,鍋でコンロを使って温めても可能であることを LearnWiz One の返信で伝えました。様々なコメントもいただきました。

私が伝えたいと思っていた内容を、受講生の皆さんが受け止めてくださったことを確認できるコメントを多くいただきました。

最後に、Society5.0 について触れました。「ペレのあたらしいふく」に描かれているのは 1900 年代のスウェーデンにおける服作りの様子であり、過去のことです。過去からも学びつつ未来を想定した学習を設計することも必要であり、テクノロジーが発展した Society5.0 時代にどのような生活をして生きていくのかも併せて家庭科の中で考えたいところです。しかし、総務省が示している Society5.0 の図は人間がピクトグラムで表されていて衣服を着ておらず、身近な衣食住の生活をイメージしにくいと感じます。そこで、あえてそれぞれの時代の衣生活を中心に反映させた Society1.0  $\sim$  5.0 のイラストを紹介しました $^{5}$ )。東京電機大学のジェフ・ブローデリック先生に描いていただいたものです。こういうものを示したり、生徒に Society5.0 時代をイメージしたイラストを描いてもらう課題を出したりすることもできるのではないかと提案して研修会を終了しました。私にとっても多くのことを学ばせていただいた研修会となりました。

今回、このような機会をいただきました家庭科教育研究所の先生方、この授業に参加してくださいました学生や卒業生のみなさんに心より感謝申し上げます。これからの家庭科教育研究所のご発展を祈念しております。ありがとうございました。

#### 【出典】

- 1) エルサ ベスコフ, おのでらゆりこ訳 (1976). ペレのあたらしいふく, 福音館書店.
- 2) 都甲由紀子 (2017). 第2章3糸について知ろう、お茶の水女子大学附属学校家庭科研究会、作る手が子どもたちを輝かす②アクティブラーニングが育てるこれからの家庭科、地域教材社.
- 3) 都甲由紀子 (2020). ワーク9, 中西雪夫, 小林久美, 貴志倫子編, 第2版 小学校家庭科の授業をつくる: 理論・実践の基礎知識, 学術図書出版社.
- 4) 都甲由紀子 (2022). 動画教材 毛糸を青く染めてみよう!青い毛糸でひもを作ろう! (Jr. サイエンス事業) https://youtu.be/j3HMWLUFVAA.
- 5) 都甲由紀子, 雨宮敏子, ジェフブローデリック (2022), STEAM 教育における被服学の可能性, 工学教育, 70(6), 52-57.

# 会員からのひとこと

今年の干支、うさぎ年のみなさんから「ひとこと」を寄せていただきました。 会員にはいろいろなお立場の方がおられますが、ここでの活動は敬称略で。

## 越川優花さん(千葉県流山市立東部中学校)



私は 2022 年 3 月に大学を卒業し、同年 4 月から千葉県の公立中学校で 3 年生の副担任として勤務し始めました。つい先日、その副担任をした 3 年生の卒業式があり、少し寂しい気持ちにもなりましたが、旅立っていく 3 年生の姿を見て、私もまだまだ頑張らなければならないなという気にもさせてもらいました。

初任であった今年度であっても、家庭科の授業は、通常級と特別支援学級を合わせた計 17 クラスを担当しました。「家庭科教員はどの学校にも 1 人しかいない」というパターンが多く、プレッシャーを感じることがあります。ですがその一方で、1 人だからこそ出来ることも多くあると思っています。伝えたいことが伝えられる家庭科の授業にするため、今の私に何ができるか模索しながら、日々、必死に勤めた 1 年間でした。

私が『家庭科の強み』と感じていることは、「授業を通して学校全体の生徒と関わることが 出来ること」と、「他教科とは違う視点から生徒の考え方や人間性に触れることができるため、 家庭科教員ならではの生徒指導に貢献できること」にあると思っています。この強みを上手く 活かすことが出来る家庭科教員になれるように、これから長く続く教員生活で努力していきたい と思います。

学生時代、卒業論文では「浴衣の着装体験を取り入れた家庭科の授業」の研究をしていました。そして卒業した現在もゼミの先生と連携をとりながら、この授業の実践を行っています。この授業は、大学の協力がなければ実践できず、生徒にとっては和服を着る非日常を体験的に取り組むことができる学習となり、生徒たちも興味関心をもち、主体的に取り組んでくれる授業となっています。そして、私自身も授業に対する研究の視点が持て、発見や学びへと繋がっています。今後も家庭科教育研究所をはじめとする大学と様々な連携をとりながら、新たな学びへと繋げていきたいと思います。

## 小松陽香さん(教科書・教材出版社)



家庭科の教科書・教材の編集にかかわり始めてまだ一年ほどの未熟者ですが,僭越ながら 一筆書かせていただきます。

私は高校までの家庭科の成績がよかったわけでもなく,大学では法学部の授業をサボって勝手に社会学を勉強していたような者で,家庭科教育については目下勉強中です。いろいろなかたのお話を聞くなかで,高校の家庭科は受験科目ではないためなかなか意欲的に取り組めない生徒さんもいることや,世間では 18 歳成年や金融教育のスタートが注目を集めているにもかかわらず,家庭科は授業時数が削られがちで,先生方は指導計画やカリキュラム編成に苦慮されていることなどを知りました。

一昨年の末に、高校以来久しぶりに教科書をめくってみて、家庭科は「いま」と「これから」の生活を多面的に網羅した科目であると気づきました。ぜひ、家庭科の教科書は卒業後も捨てずに持っていていただきたいです。一方で、新しい商品やサービスが次々と提供される現代において、若いひとたちからは「家庭科で教わることはコスパやタイパがよくない」なんて思われることもありそうです。まあ、大人も「時短」や「手抜き」をしてますし……エラそうなことは言えません。

そのような考えを巡らせつつ,「では,家庭科教育にかかわるものとして,自分には何ができるでしょうか」と問う毎日です。ぜひ,会員のみなさまのお話もお聞かせいただけましたらうれしいです。

## 大本久美子さん(大阪教育大学)



3月3日は桃の節句。この時期に食べたくなるちらし寿司は、ある程度の人数がいれば、つくり甲斐はありますが、1人で食べる日は、モチベーションがあがりません。1人か2人のスモールサイズ家庭でもつくる意欲がわき、年中行事や季節感を大切にして暮らすことができる本を書いてみたい、と思った今年の「ひな祭り」でした。

これは、自身のこだわりや大切にしたい価値をどのように生活に反映させるかを長年考えてきたからかもしれません。例えば私のこの時期のこだわり(愉しみ)は、細くてやわらかい菜の花をオリーブオイルで炒め、軽く塩をふって醤油で香りづけし、ご飯の上に乗せた「菜の花丼」を食することです。摘みたての菜の花は、身体が目覚める感覚になります。

さて、3月は様々な記念日があります。3月15日は、**世界消費者権利デー**です。消費者の権利を促進するために国際消費者機構 (CI: Consumers International) が提唱しています。 今年のテーマは、「クリーンエネルギーへの移行に向けて**消費者の力の拡充**を」です。 また 3 月 21 日は、**世界家政学の日**です。この家庭科教育研究所ニュースの Vol.2 (12 月発行)の編集後記でも紹介されていますが、今年のテーマは「Waste literacy」です。「何を捨てることが必要で、何を捨ててはいけないのか」その取捨選択の価値観・理念を生活者のリテラシーとして啓発し、実践する姿を示していくことの重要性を工藤先生が発信されていました。

3月8日の**国際女性デー**もジェンダーギャップ指数下位の日本がジェンダーフリー社会を実現する ために、大切にしたい記念日です。

今年は、ジェンダーやエネルギー問題等をより強く意識しながら、何を大切にして、日々の生活を営んでいくのかを主体的に取捨選択できる生活者のリテラシーを育む家庭科教育が広がっていくといいですね。年中行事や季節感も大事にしながら自らが心地よいと思う生活を愉しむ人が増えることを願って。

### 堀内かおるさん (横浜国立大学)



年度末が近づくにつれ、この1年間に家庭科に関わって出会った方々や家庭科について考えた出来事が思い出されます。私のゼミ生の中でも、社会人として7年前に博士後期課程に進学した大学院生は、長年の努力が実って、先日博士号を取得しました。修士課程では、一人は教職大学院を修了し、県立高校の教員として新たな一歩を踏み出します。新年度から大学4年生に進級するゼミ生は、いよいよ教員採用試験に向けて勉強を重ねています。学生たちにとって、3月はこれまでの大学・大学院での学びの一区切りの時期であり、4月からの新たな環境に飛び立つためのウォーミング・アップの機会です。未知の可能性を秘めた若い方々が、これからの「人生の地図」となる家庭科の学びを思い出しながら歩んでいかれることを願っています。

共同研究でお世話になった家庭科の先生方のなかにも4月からの異動が決まり、引継ぎの準備をしている方々がおられます。これまでのキャリアを基に、新しい学校で新たな家庭科の授業を生徒たちと一緒に創っていくことへの期待をこめて、新天地でのご活躍をお祈りいたします。

私自身はと言えば、そう遠くはない未来に到来する本務校での定年退職が現実味を帯びてきて、 大学教員としての終活の先にめざすべきものについて、思いを巡らせています。暮らしの中で生き て働く力を育む家庭科の学びは、世代を超えて、日々の生活につながっています。家庭科教育研究 者として、家庭科の〈知〉とは何かを明らかにするとともに、その〈知〉の媒介者である家庭科 教師の方々とともに、不確実で多様なこれからの時代を生きる子どもたちにとっての、真の 「生きる力」とは何か、それはどのようにして身に付けることができるのか、問い続けたいと考えて います。



今日は World Home Economics Day: 世界家政学の日、"Waste Literacy"をテーマに世界のあちこちでいろいろな催しが開催されています。この研究所ニュース Vol.3 を、この日に合わせて刊行したいと準備してきました。家政学の考え方を広く発信していこうという呼びかけへの、ささやかな Yes! の表明としてです。そして、今年の WHED のテーマに寄せて少し考えたことを書きます。

## World Home Economics Day 2023 に寄せて

"地球上の資源には限界がある"という警鐘が発せられてすでに半世紀が経ちました(ローマクラブ報告「成長の限界」1972)。今なお、化石燃料を資源とした大量生産・大量消費は留まることなく、大量消費から循環型社会への社会構造・産業構造の根本的な変革が求められています。この社会の変革を現実とするには、"持続可能な社会"という未来社会をデザインし、現実に起こっている問題への事後対応ではなく、「このまま放置するとどのようなことが起こるか」の予知予見能力を社会の皆が持つ必要があります。

この予知予見能力は、家政学の "Future-proofing - anticipating future developments to minimize-negative impacts and optimize opportunities"(IFHE,2008)ともいえます。予見能力を発揮して未来を思い描き、マイナスの影響を最小限に、機会を最適化するという家政学のアプローチです。今、社会をあげてそういう力が求められており、今年のテーマ "Waste Literacy" もそこに位置付けられると思います。

では、世界に先駆けて「持続可能な開発のための教育」を提唱し、国際社会をリードする立場である日本において、そして、"もったいない"という世界共通の言葉のルーツである日本において、子どもたちは学校教育の中で"Waste Literacy"に関してどのような学びをしているのだろうか、これが私にとってのWHED2023のテーマでした。いまだ、感覚レベルで捉えた未熟な内容に留まるのですが、共有したいと思います。

手始めに、学習指導要領を手がかりとして、小中高等学校において「Waste Literacy」という文脈で捉えることができる学習がどのように行われているのかみていくことにしました。今の教育の潮流を捉えれば、「Waste Literacy」に関する学習の可能性は大きく拓かれていることが想定されます。今回の改訂で初めて設けられた学習指導要領の前文には「生命を尊び,自然を大切にし,環境の保全に寄与する態度を養うこと」とあり、子どもたち自らが学び、学んだことを自分の人生に生かす「主体的・対話的で深い学び」が推進されています。子どもたちが変革の主体者となり、他者と協働して課題を解決していくことが期待されている中で、持続可能な社会の構築に向かって新しい価値をつくっていく教育はまさに花盛りと思えます。

そんな仮説を胸に、小中高等学校と段階を追ってみてみました。家庭科では、消費生活・環境の分野 のみならず全体を通して、しかも、小中高等学校の全課程においてたくさんの学習が行われていることは ご承知の通りですので、ここでは家庭科以外のものをみています。 小学校では、4年生、5年生の社会科に、廃棄物処理の事業のことを知る、資源の有効活用、食料 生産などの関連しそうな学習課題が出てきます。

中学校では、社会科の「公民」に地球環境、資源、エネルギー、持続可能な社会の形成といった課題が、理科「第2分野、自然と人間」では、環境保全、科学技術の利用の在り方、持続可能な社会をつくるといった課題が出てきます。技術家庭「技術分野」の目標には、持続可能な社会の構築に向けて適切かつ誠実に技術を工夫し創造しようとする実践的な態度を養う、とあります。

そして、高等学校では、教科公民の「公共」で、持続可能な社会づくりの主体としての自分、「倫理」 において、生態系、調和的な共存関係への思索、そして、理科の「科学と人間生活」において科学技術 の発展について学ぶ機会が提供されています。

#### 小学校

#### 『社会』

#### 【4年生】

内容(2)人々の健康や生活環境を支える事業

イ (イ) 廃棄物を処理する事業は、衛生的 な処理や資源の有効利用ができるよ う進められていること、生活環境の 維持と向上に役立っていることを 理解する。

#### 【5年生】

内容(2)我が国の農業や水産業における 食料生産について

- ア (ア) 我が国の食料生産は、自然条件を 生かして営まれていること、国民の 食料を確保する重要な役割を果たし ていることを理解する。
  - (イ) 食料生産に関わる人々は、生産性 や品質を高めるよう努力したり輸送 方法や販売方法を工夫したりして、 良質な食料を消費地に届けるなど、 食料生産を支えていることを理解 する

#### 中学校

#### 『社会』「公民」

- D 私たちと国際社会の諸課題
- (1) 世界平和と人類の福祉の増大
- イ 地球環境,資源・エネルギー,貧困な どの課題の解決のために経済的、技術 的な協力などが大切であることを理解 する。
- (2) よりよい社会を目指して 持続可能な 社会を形成すること

#### 『理科』「第2分野 自然と人間」

(イ) 自然環境の保全と科学技術の利用 自然環境の保全と科学技術の利用の在り 方について科学的に考察する。

持続可能な社会をつくることが重要である ことを認識する。

#### 『技術家庭』「技術分野」

目標(3)よりよい生活の実現や持続可能な 社会の構築に向けて,適切かつ 誠実に技術を工夫し創造しようと する実践的な態度を養う。

#### 高等学校

#### 『公民』

#### 「公共」内容C

持続可能な社会づくりの主体となる私たち 持続可能な地域,国家・社会及び国際社会 づくりに向けた役割を担う,公共の精神をもった 自立した主体となることに向けて,幸福,正義, 公正などに着目して,現代の諸課題を探究する 活動を通して,次の事項を身に付けることができ るよう指導する。

ア地域の創造、よりよい国家・社会の構築及び 平和で安定した国際社会の形成へ主体的に参画 し共に生きる社会を築く

#### 「倫理」 B 現代の諸課題と倫理

自然については、人間の生命が自然の生態系の中で、植物や他の動物との相互依存関係において維持されており、調和的な共存関係が大切であることについても思索できるようにする

#### 『理科』「科学と人間生活」

内容(1)科学技術の発展 科学技術の発展について、次の事項を身に付ける ことができるよう指導する。

ア 科学技術の発展が今日の人間生活に対して どのように貢献してきたかについて理解する

出典:平成29年告示「小学校学習指導要領」、同「中学校学習指導要領」、平成30年告示「高等学校指導要領」より著者作成

学習指導要領を通読して、子どもたちがこんなにもたくさんの学習課題をこなしているということ、それを子どもたちに伝えていくこと、それも探究的に、という先生方の大きな役割についても、改めて感無量な感じです。同時に、小中高と系統的な学びができる家庭科を含めて考えてみても、学習内容の全体量の中で、「Waste Literacy」に関する学習機会がこんなに少ないということも驚きでした。

ここで挙げた学習内容は、学習指導要領の文言を読んだだけのかなり幅広な解釈によるものです。それでもなお、こんなに少ない、これが第1に感じられたことでした。

2つ目には、

学習内容はごく限定的であると思いました。

子どもたちに届けられるメッセージの全体が、現在の社会の仕組みを理解して維持していこうよという方向になっていることです。ここも、学習指導要領を通読したレベルでの仮説に留まることですが、社会科や理科で扱う関連の課題は、生産性、品質向上、安全性の向上、科学技術の進展といった、社会の進歩の光の部分「得る(上にのぼっていく)」方向に進む内容がほとんどで、「Waste Literacy」に求められるもう一つの方向性、持続可能性の視点から社会を批判的にみてみる、「捨てる(減らす、退く)」、これらの社会的価値、生活のスタイルについての

社会科が目標とする「自覚ある地域社会の一員」、「グローバル化する国際社会に主体的に生きる平和で民主的な国家及び社会の形成者」、「公共の精神をもった自立した主体」の資質・能力に、社会の進歩の光と影、自分の行ったことが自分以外の人にどのような影響を与えているかといった循環の視点が含まれていないとしたら、とても不思議なことに思えます。

まるで、持続可能性という概念を教えずに、手段だけを教えているかのようです。

変革の担い手として、新しい価値観をつくり、ここから改善への道を発見し動いていく子どもたちが育っていくことを目指す教育であるなら、現在の社会の枠組みをはずして飛び越えていく、これまでとは違う角度からアプローチしてみる、そういう思考様式を育む学習課題と提供の方法を探らねばならないのに、と思います。

そんなことを考えるのは、やはり私が家庭科にいるからだろうと思います。

そして、教育全体の中での家庭科の特異性、他教科では代替できない視点と方法と内容をもっている教科であるという、いつもの到達点に至ります。そもそも持っている時間軸が違います。社会現象の見方も違います。これまで社会の進展の中で生じてしまったことばかりではなく、これからの社会に必要なこと、自分たちはどういう未来を築くか、何を持続可能にしていくのかという問いに向き合い、豊かな自然の中に自分をおき、そこで環境との相互作用を行いながら環境の全体像を理解していくのが家庭科です。「社会」についても、家庭科は、厳然としてそこにあるものとしてではなく、よりよい方向を探りながらみんなで一緒につくり上げるものだと認識します。

教育の方向性全体を大胆に変えていこうという今、家庭科の影響力で他の教科を変えていくこと、これも家庭科の新しい役割だと思い至りました。良く考えて選択する、賢く使う、捨てるものを減らす、捨てずに生かす…"Waste Literacy" を生活の具体的な実践課題と結びつけて、現代社会を生きる私たちみんながもつベーシック・リテラシーの育成に中心的な役割を果たしながら、教育そのものを変えていく、そんなシナリオが浮かびました。

今号は、会員のみなさまに寄稿していただいたことから、充実した内容となり ました。長編になりましたが、最後までお読みいただきありがとうございました。

新しい季節がやってきました、卒業式、入学式、…お忙しい日が続くことと思います。 新しい年度がみなさまにとってよいものでありますように!

そして、研究所の活動も2年目に入ります。これからもどうぞよろしくお願いします。